休の日に

成城學園　大塚喜一

今日は幼稚園の一人舞臺だと思ひながらいつになくひつそりとした道を行くと、園の少し前でM子さんに會つた。何だか悲しそうな顔をしてゐるので聞いて見ると「幼稚園には誰も居ないの」「何が書いてありましたか」「オヤスミと書いてあつた」「さてはやつぱり!?」と思ひながらともかく一所に行くと、

「本日（十二月二日）オヤスミ」

と掲示板に書いてある。昨日は學園全體の科學藝術祭があつたが、幼稚園は出なかつたので休では無からうと思つてゐたが、昨日漸く決定して急に電話や電報で通知した事であつた。何事も知らずに來た園兒の柔かい新鮮な心にこれがどう響くかと思へばまことに恐懼する。不得止歸りかけやうとすると、M子さんがお友達を一人肩に手をかけて連れて來た。近づいて見ると泣いてゐる。近頃入園したU子さんである。

「どうしたの？」

「私一人で歸れないの」

「お家は何處」と定期を見ると東中野である。

「電話は？」

「無い」

「來る時は誰と？」

「驛までネーヤに送つてもらふの……歸りはまり

子さんのおばあちやんと一しよに歸る」

「それぢや今日は先生がお家まで送つて歸つてあげますからね」

と慰めたので泣き止んだ。

今日は珍らしく晩秋の空が氣持よく晴れてゐる。風は少しあるが冷く感ずる程でもない。「せつかくいらつしたのだから其邊を散歩しませう」と三人連れでいつもよく遊ぶ芝生のスベリへと行く。眞白な富士が連山の彼方にくつきりと青空に聳えて見える。ほんとに休にするには勿體ないほどよい天氣だ。今日は「幼稚園」といふ生活の輪廓を離れ「先生」といふいかめしい兜を脱いで、自然なあたりまへの（人間的）態度で幼兒に接するの機を得た。二人の幼兒は交代に盛に僕に話しかけた。寧ろこちらは應答するだけで話しかける間が無い位であつた。——道々見聞するもの、お家のお父さんやお母さんの事、お友達の事、過去のうれしかつた經驗、等々。話は極めて圓滑にらくに進んで行づた。其間の折々の沈默の裡にも話の餘韻が漂ふてゐた。組が違ふのでいつもは一所に遊ばない二人も今日は睦まじさうに見えた。かうした私達は、山林を通りぬけてM子さんのお家でお辯當を頂き、驛へと歸る道すがら、嘗て僕が郷里の母園の修了兒童數名を招いて春の野に遊んだ時の事を思ひ出して、久しぶりで兄ちやん時代に歸つたやうな氣がした。U子さんの隣に腰かけて電車で歸る折も、今日は童心の寶玉を拾ひあげたやうに思はれた。今日こそは、子供の生活の中に幼稚園を見出し得たのではあるまいか。たつた二人の子供では保育も何も出來はしないと云はれるかも知れない。實際もう少しお友達が欲しいやうな氣もしたが、しかし幸福な愉快なこの生活が現存せし事を何人が否定し得やうぞ。御蔭で今日は「いけません」を言はずに濟んだ。他園參觀よりも、登山や旅行よりも、今日は思ひがけない經驗を得た事を神に感謝する。